

# 弓塚さつき（憑）の箱庭生活【完結】

メデューサLOVE

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

弓塚さつき（憑依）が箱庭に呼ばれた話。

さつき（憑依）の口調が安定しないのは仕様です。

性格割合は憑依人格8、さつき2、位なのでさつきぽくないですが。

さつちんのギフトが判明したら設定書きます。

弓塚さつき（憑依）の設定への文句はスルーします。

転生憑依に神様は一切関与しておりません（^^）／

いろいろあるとは思いますがひと言、理屈で考えるな！感じるんだ！な感じで察して下さい。

## 目次

|                  |    |
|------------------|----|
| さっちゃん設定だつてく      | 1  |
| YES！ウサギが呼びました！   |    |
| はい、ウサギに呼ばれたようです。 | 5  |
| はい、虎にケンカを売りました。  | 11 |
| はい、これが私のギフトです。   | 17 |
| はい、お風呂は至高です。     | 28 |
| はい、虎狩りと箱庭の吸血鬼です。 | 35 |
| はい、交渉と駆け引き（笑）です。 | 47 |
| はい、白夜叉との夜語りです。   | 52 |
| はい、ペルセウス戦です。     | 58 |
| はい、終了です。         | 66 |

## さっちゃん設定だつて〜

名前、弓塚さつき。

フルネーム、弓塚・ブリュンスタッド・さつき。

本作品の主人公、弓塚さつきに憑依したのちさっちゃんの願いである遠野志貴との恋愛成就を決意、元々は二重人格のような状態だったが志貴がアルクエイドと結婚する際に、アルクエイドの「さっちゃんもいつしよに志貴と結婚しよ！」の一言で志貴と結ばれさっちゃんの願いの成就に伴い人格が一つに交わる。

薬味小僧の世界に渡航経験あり。

感情的になると口が悪くなる。

因みに志貴が婿に来ている。

志貴との間に一女を儲ける。

精神的肉体的に関係なく幼い子供に危害を加える者を嫌悪する、理性でギリギリを保つが完全にキレると辺りが血の海に成る。

カルデアに呼ばれたら確実にバーサーカー。魔術戦のできるバーサーカーとか……。

生年月日、1985年8月15日、血液型、A型

(本作開始時217歳)但し薬味小僧世界の魔法球での年月を除く。

身長166cm、

体重53kg

スリーサイズ

B 87 cm

W 56 cm

H 86 cm

髪は茶髪のセミロングストレートだが髪先端がやや赤みかかったピンクをしており原因は不明。

天敵、

アルトルージュ・ブリュンスタッド、

ゼルレツチ、

ブリュンスタッド

ギフトカードの色はトワイライトオレンジ

(ギフト設定は一部を除き問題児よりになっています。)

保有ギフト

ロード・オブ・ヴァンパイア  
死徒二十七祖

弓塚さつきの世界における死徒の最上位。

ホストマスタ  
主催者権限でもある。

ドレイン・ガーデン  
枯渴庭園

弓塚さつきの代表とも言えるギフト。

枯れゆく庭園の固有結界。

原作より強力になっており固有結界内のマナやオドだけでなく生命力、果ては霊格まで消滅させる。

だが結界内に存在する自分以外の生命が死に絶えない限り結界が解ける事がないため結界範囲内に仲間がいると使えない。

天敵は第三永久機関及び人類最終試験。

メルティ・ブラッド  
MELTY BLOOD

発動中に触れた相手にActのギフトを与える。

MELTY BLOODのギフトを持つものがActのギフトを持つものと戦闘をおこなう場合能力に補正が入る。

他にも能力があるらしい。

ブリュンスタッド  
朱い月

月の主権の一つ、ブリュンスタッドから預かったものでありさつきには使用権利がないがこのギフトが何かの拍子に発動してしまわないようにさつきは能力の四十%をこのギフトの封印に使っている。

さつき本人は早くアルクエイドに戻したいと思っている。

千年城・ブリュンスタッド

アルクエイド及びさつちんの住居。

箱庭に於てはゲーム盤である。\*ここ重要\*

これは場所の移動ではなく場の上書きであるため位置は変わらない。

千年城・ブリュンスタッドが展開されると吸血鬼の能力に10%の補正が入る。(レティシアも対象)

ゲイ・ボルク

影の国の女王スカサハから貰った赤枝の槍。

さつきはこれを二本持っている。

オルタナティブ派でありケリ・ボルクを好む。

因果逆転は(箱庭の世界の影響か)出来ないが突破力はある。ガイ・ボルクより威力は多少劣る。

(しかし因果逆転ができてもしつきの幸運がEのため、第五次ランサー並みの不遇となる。)

スカサハとの修行の事を聞くと目からハイライトが消えるらしい、是非も無いよね！

全て遠き理想郷

説明不要の絶対防御。

アルトリアから渡されたが理由を教えずにまだに何故渡されたのか理解が出来ていない。

ただ使い勝手はいいので使っている。

さつきは使える事に疑問を持っていない。

約束された勝利の剣

フランスで湖の貴婦人に貰ったさつき用に調整された聖剣。使用回数、威力共にデチューン化している。

その他

ルーン魔術。

スカサハに教えて貰った魔術、アンサス超便利

ブレスト・バレー。

魅惑の御胸様、原作のさっちゃんより大幅に増えた胸にいろんなものを出し入れする、

けして「トラッシュユ&ボックスゴミ箱」ではない。

備考

さっちゃんの娘は埋葬機関に所属しておりシエルのあとを継ぎ第七聖典を保有している。

見ためは原作のさっちゃんをポニーテールにした感じ。設定には多くの伏線が存在します。

ゼルレツチにより薬味小僧世界に居たことがある。

エヴァンジェリンは可愛い先輩。

名前、レン

志貴が亡くなりアルクエイドも眠ってしまったため現在はさっちゃんと使い魔契約をしている夢魔。

ギフトカードの色はミッドナイトブルー

保有ギフト

ナイトメア  
夢魔

眠っている相手に淫靡な夢を見せ生気を奪うギフト。

メルティ・ブラッド  
M E L T Y B L O O D

上記参照。

YES！ウサギが呼びました！  
はい、ウサギに呼ばれたようです。

私の名前は弓塚さつき、そう月姫の弓塚さつきなのだ。例え今年で217であり死徒二十七祖の第十位になって庭園の二つ名を付けられようとも私は弓塚さつきなのだから。

例えば世界一周修行中に今の時代には存在しないはずの影の国にいつのまにか迷い込んでいておっぱいタイツ師匠に無理矢理と地獄巡りに付き合わされてルーン魔術を覚え、必至になって修行をし、三十代の時に修めた技術を使いなんとか一撃を入れたら本気になった師匠にフルボッコにされましたが一撃を入れた褒美にとゲイ・ボルクをもらいました。目線をそらされながらでしたが。と言うか雷速に反応するって化け物ですか？

他にはコーンウォールで迷子になっていたら誰かに呼ばれた気がして、気のせいと思ったらしいのまにかアヴァロンにいたり。そこに腹ペコ王がいて、かつての約束を持ち出されて全力で手合わせをすることになりました。

まさか二人とも決定打が決まらず意地になって地形を変えるほどの攻撃になっていてシロウ君に二人して正座で説教を受けました。

長時間の正座なんて子供の頃以来なので足が痺れて涙目になったりしましたよ。

私がアヴァロンを出るとき全て遠き理想郷を渡されたんですが理由を聞いても教えて貰えず今でも謎のままです。

フランスでは湖の貴婦人に会ってアルトリアさんの話で盛り上がりました。最近暇だったらしく話相手になってくれて尚且つアルトリアさんの近状を教えてくれたお礼にと私にも使えるように調整してくれた約束された勝利の剣を貰いました。但し一日に二発以上使うと体が持たない事と私にも使えるように調整したため威力が七割にまで落ちた事など注意事項を教えてもらい彼女と別れました。

さてなぜ私がこのようなことを言っているかというたとぶん上空



4000 円ほどをぜっさんパラ無しスカイダイビング中でありつまりは現実逃避です。と現実逃避している間に残り500 円まで迫る湖、そう湖だ、昔の修行と契約、そして全て遠き理想郷で太陽は完全に平気になったけど海とか湖は吸血鬼である私にはいささかまずいです、だって渡れないから。いや別に死にはしないけど気分的にも遠慮したいです。

湖が残り200 円まで迫ってきたところで私は七つ道具の1つであるテーブルクロスを胸の谷間から取りだしパラの替わりにします。

大きな胸に何かしら挟んだりしまったりする描写が一部の作品にはありますが私のはネギまの龍宮さんがやっていたのを教えてもらい私なりにアレンジして修得した技術です。すごく便利で重宝します。

私は湖を避け陸地に着陸しました、私より先に落ちていった三人の人間の子も湖からあがってきたところで私は三人を見て顔が少し痙攣した気がした。だってこの三人絶対問題児に出てくる逆廻十六夜、久遠飛鳥、春日部耀でしょ。

拜啓アルクエイドさん。

私弓塚さつきはどうやら箱庭に呼ばれてしまったようです。

「し、信じられないわ！まさか問答無用で引き摺りこんだ挙げ句空に放り出すなんて！」

飛鳥が空に放り出された事に文句を言い出す。

「右に同じだクソツタレ、場合によっちゃその場でゲームオーバーだぞコレ、石の中に呼び出された方がまだ親切だ。」

十六夜の文句は少しずれてるけど私も同意かな？

「……いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう？」

「俺は問題ない」

「私も湖に落ちるよりは石の中の方がましかな？」

「そう、身勝手ね。」

三人は服の端を絞りはじめる。

「あら、あなたは濡れていないのね。」

「それは陸地に降りたからかな。」

「陸地に？だけど貴女陸地に落ちたにしてはどこもケガをしているようには見えないけど。」

飛鳥の視線が私の全身を見つめる、見つめられるとちよつと恥ずかしいな。

「ケガはしてないよ、あれぐらいでケガをするほど柔じゃないつもり、あとあまり見つめないでほしいかな、恥ずかしい。」

「あら、ごめんなさいね、それより貴女の服もしかしてメイド服？」  
飛鳥が私の服について聞いてきた、確か飛鳥はメイドに憧れがあったつけ、あれ？金髪の使用人だつけ？

「確かに私の仕事にはメイドも含まれるけど。」

どちらかという私の仕事は戦闘方面寄りかな？たまに襲撃されるし。

「此処・・・どこだろう？」

耀のつぶやきに私と飛鳥の会話が途切れる。

「さあな。まあ、世界の果てっぽいものが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃねえか？」

耀のつぶやきに十六夜が応えながら髪を掻きあげ。

「まず間違いないだろうけど、一応確認しとくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が？」

「そうだけど、まずは“オマエ”って呼び方を訂正して。――私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。それでその猫を抱きかかえている貴女は？」

飛鳥が耀に訊ねる。

「・・・春日部耀。以下同文。」

耀が面倒そうに応える。

「そう、よろしく春日部さん。次に野蛮で凶暴そうな貴方は？」

飛鳥は十六夜に自己紹介を求めた。

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です、粗野で凶悪で快樂主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様。」

十六夜が高らかに皮肉を混ぜて自己紹介をする。

「そう、取り扱い説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」  
飛鳥も飛鳥で十六夜の皮肉に皮肉で返す。

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

二人とも負けず嫌いだな。

「最後に貴女の名前を覚えてもらえるかしら？」

「私は弓塚さつきっていいいます。」

私は名前だけを名乗ることにした。

(うわあ・・・なんか問題児ばかりみたいですねえ・・・しかもメイド服の方からは不思議な感じするのですよ。)

物陰から観ていて彼らが協力する姿が想像できないとともにさつきに何かしら感じとった黒ウサギは重くタメ息を吐いた。

「で、呼び出されたはいいいけどなんで誰もいねえんだよ。この状況だと招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」

「そうね、なんの説明もないままでは動きようがないもの。」

「・・・。この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」

(全くです)

黒ウサギはこつそりツツコミを入れた。

(まあ、悩んでいても仕方がないデス。これ以上不満が出る前にお腹を括りますか)

さつき以外が罵詈雑言を浴びせている様を見ると怖じけつきそうになるが、此処は我慢である。

「だったらそこで隠れている人に聞けばいいんじゃないかな？」

突然のさつきの言葉に物陰に隠れていた黒ウサギは心臓を掴まれたように飛びはねる。

四人の視線が黒ウサギに向けられる。

「あら、貴女も気づいていたの？」

「気づいていたというよりも、上から丸見えだったから。」

「ま、丸見えだったのですか！、あ、あと御三方様、そんな狼みたい

に怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやいますよ?ええ、ええ、古  
来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆  
弱な心臓に免じてここは1つ穩便に御話を聞いていただけたら嬉し  
いでございますヨ?。」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「ウサギって実は孤独じや死なないらしいけど?」

「あつは、取りつくシマもない・・・ってそれは本場でございますか  
!?!」

黒ウサギはさつきの言葉に驚愕しながらも四人を冷静に値踏みし  
ていた。

(肝っ玉は及第点、この状況でNOと言える勝ち気は買いです。)

などと黒ウサギが考えていると、耀が黒ウサギの隣まで接近し黒ウ  
サギのウサミミを

「えい」

「フギャー!」

力いっばい引っ張った。

「ちよ、ちよっとお待ちを!触るまでなら黙って受け入れますが、ま  
さか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、  
どういう了見ですか!?!」

ウサミミを引っ張られた黒ウサギが抗議のこえをあげる。

「好奇心の為せる業」

「自由にもほどがあります!」

「へえ?このウサ耳って本物なのか?」

十六夜が反対側から黒ウサギの耳を引っ張った。

「・・・。じゃあ私も」

飛鳥も左から引っ張る。

「ごめんなさい、私も耳触ってもいいかな?」

私も黒ウサギの素敵耳触ってみたい、最近は白レンも触らせてくれ  
ないし。

\*\*\*

「……あ、あり得ない。あり得ないのですよ。まさか話を聞いてもらえるために小一時間も消費してしまうとは。」

「いいからさっさと進めろ。」

「ゴホン、それではいいですか、御四人様。定例文で言いますよ？言いますよ？さあ、言います！早く言え。」ごめんなさい！」

黒ウサギに十六夜が話を進めろと催促する。

「では、ようこそ、箱庭の世界へ！我々は御四人様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をと思い召喚いたしました！」

「ギフトゲーム？」

「そうです！既に気づいていらつしやるでしょうが御四人様は皆、普通の人間ではございません！その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその「恩恵」を用いて競いあう為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！」

黒ウサギが箱庭について、コミュニティについて等説明をする、黒ウサギの説明が終わり十六夜が一言、

「この世界は面白いのか？」

「YES。『ギフトゲーム』は人を超えた者達だけが参加できる神魔の遊技。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギが保証いたします♪」

はい、虎にケンカを売りました。

「ジン坊っちゃーン！新しい方を連れてきましたよー！」

「お帰り黒ウサギ。そちらの女性三人が？」

「はいな、こちらの御四人様がー」

黒ウサギが振り返るとそこに居るのは四人ではなく三人だった。

「……え、あれ？もう一人いませんでしたっけ？ちよつと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から『俺問題児！』ってオーラを放っている殿方が」

「十六夜君？それなら『ちよつと世界の果てを見てくるぜ！』って言うって走って行っちゃったけど」

世界の果てが滝じゃなければ私も行きたかったんだけどなく。

「なんで止めてくれなかつたんですか！」

「だってものすごい目をキラキラさせた笑顔だったから止めたら悪いかなって。」

「うっ！……仕方ありません、ジン坊っちゃん。申し訳ありませんが御三人様のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「わかった、黒ウサギはどうするの？」

「問題児様を捕まえに参ります、事のついでにー」箱庭の貴族と謳われたこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやります」

黒ウサギは怒りを現わにし髪を黒髪から淡い緋色に変え

「一刻ほどで戻ります！皆さんはゆっくりと箱庭ライフを御堪能くださいませー！」

黒ウサギはそう言うともものすごい速度で駆けて行った。

「……箱庭の兎は随分早く跳べるのね、素直に感心するわ」

飛鳥が黒ウサギの速さに感心する。

「そうかな？あれ位の速度なら私のいた世界にはそれなりにいたけど。」

アルクエイドさんとか師匠とか。私もあれ以上に早く動けるし。

「貴女のいた世界には黒ウサギと同等の方がいらっしやるですか

!？」

ジンが驚いたようにさつきを見上げる。

「いるよ、ほらそんなことより箱庭を案内してくれるんだよね？よろしくね、えーっと。」

「あ、僕はコミュニケーションのリーダーをしているジン＝ラッセルです。齢十一になったばかりの若輩ですがよろしくお願いします。三人の名前は？」

「久遠飛鳥よ。そこで猫を抱えているのが」

「春日部耀」

「弓塚さつきです」

三人はジンに自己紹介をした。

\*\*\*

『お、お嬢！外から天幕の中に入ったはすなのに御天道様が見えとるでー！』

「・・・本当だ。外から見たときは箱庭の内部なんて見えなかったのに」

「箱庭を覆う天幕は内側に入ると不可視になるんですよ。そもそもあの巨大な天幕は太陽の光を直接受けられない種族のために設置されていますから」

「それはなんとも気になる話ね。この都市には吸血鬼でも住んでいるのかしら？」

「いるよ〜♪」

吸血鬼がいるのかという飛鳥の質問にジンではなくさつきが応える。

「なぜ弓塚さんが応えるのかしら？」

「えっ、だって私吸血鬼だもん。」

さつきは自身が吸血鬼であることをカミングアウトした。

「え・・・えええ!!さつきさん吸血鬼だったんですか!？」

ジンはさつきが吸血鬼だったことに大声を上げて驚く、飛鳥と耀もさつきが吸血鬼と知り固まる。

「ちよ、ちよつと待ってください！吸血鬼は箱庭の外、太陽の光を直接受けられないんですよ、さつきさんは今しがた箱庭の外から来たじゃないですか！」

ジンが驚きから我に帰るとさつきが外から来たのに対して落ち着きを無くしながらも尋ねた。

「まあ、それはまた今度説明するから、ほらほら案内してね。」

さつきは無理やり話を終わらせて先を促す。

四人は身近にあった“六本傷”の旗を掲げるカフェテラスに座る。すると注文を取るために店の奥から素早く猫耳の少女が飛び出して来た。

「いらつしやいませー。御注文はどうしますか？」

「えーと「ちよつと待って」どうしたの？」

飛鳥が注文しようとするのをさつきが待ったをかける。

「この子もいつしよにいいかな？」

さつきは胸の谷間に手を入れ一匹の黒猫を取り出した。

「猫？」

「猫ですね」

「かわいい」

『子猫やな』

「子猫ですね」

店員含む四人と一匹の視線がさつきの腕で丸くなっている子猫に注がれる。

「レン起きて、お茶にしよう。」

すると子猫はムクリと起きあがり人間の少女に姿を変えた。

「「.....」」

ジン達はもう何に驚けばいいかわからず沈黙してしまった。

さつきはレンを膝にのせてメニューをレンの前にもってくる。

「.....」

レンはメニューの一点を指差しさつきを見上げる。

「えーと、紅茶を三つと緑茶を一つケーキセット一つ。あと軽食にサンドイッチを」



さつきは沈黙しているジン達を無視して注文を決めていく。

『ネコマンマをー』

一匹だけ思考停止することのなかった三毛猫が追加注文をする。

「はいはい。ティーセット四つとケーキセット一つにネコマンマですね」

「三毛猫の言葉、分かるの？」

耀は店員が三毛猫の言葉を理解しているのか尋ねる。

「そりや分かりますよー私は猫族なんですから。」

「・・・箱庭つてすごいね、三毛猫。私以外に三毛猫の言葉が分かる人がいたよ」

『来てよかったなお嬢』

耀は自分以外にも動物と意思疎通できる人がいることを喜んでいった。

「おんやあ？誰かと思えば東区画の最底辺コミュニティ〃名無しの権兵衛〃のリーダー、ジン君じゃないですか。今日はオモリ役の黒ウサギは一緒じゃないんですか？」

品のない上辺だけの上品ぶった声がジンを呼ぶ。

あー、これがガルドなんちゃらか、原作の挿絵やアニメのほうがいいケメンかな。

ジンも売り言葉に買い言葉であくあケンカはじめたよ、まあ物理じゃないだけましかな。

ガルドもなんかジン君のコミュニティの現状を話してどうにか自分のコミュニティに引つ張れないか必死だし、余裕のない。

「どうですかレディ達。返事はすぐには言いません。コミュニティに属さずとも貴女達には箱庭で三十日間の自由が約束されています。一度、自分達を呼び出したコミュニティと私達〃フォレス・ガロ〃のコミュニティを視察し、十分に検討してからー」

うん、ガルドがメに入ったね。

「結構よ。だってジン君のコミュニティで私は間に合っているもの」

飛鳥はカップの紅茶を飲み干すと耀に話しかける。

「春日部さんは今の話をどう思う?」

「別に、どっちでも。私はこの世界に友達を作りに来ただけなもの」

「あら意外。じゃあ私が友達一号に立候補していいかしら?」

「……うん」

『よかったなお嬢……お嬢に友達ができてワシも涙が出るほど嬉しいわ』

ホロリと泣く三毛猫。

「弓塚さんはどうかしら?」

「私もジン君のコミュニケーションでいいかな、血生臭い虎のコミュニケーションにはちよつとね」

「ちよ、ちよつと待っててくださいレデ

「黙りなさい」

ガチン! ガルドの口がなにかに強制されたように勢いよく閉じる。

「……!?!?」

ガルドは口を開けることが出来ずに混乱する。

「私の話はまだ終わってないわ。貴方からはまだまだ聞き出さなければいけないことがあるのだもの。貴方はそこに座って、私の質問に答え続けなさい」

飛鳥の言葉に力が宿り、今度は椅子にヒビが入るほど勢いよく座り込む。

「お、お客さん! 当店で揉め事控えてくださー」

「ちようどいいわ。猫の店員さんも第三者として聞いていってほしいの。多分、面白いことが聞けるはずよ。」

飛鳥が審問官よろしくガルドに質問し告白を強制させる。

そしてガルドは決定的なひと言を口にした。

「もう殺した」

その場の空気が瞬時に凍りつく。

「初めてガキ共を連れてきた日、泣き声が頭にきて思わず殺した。それ以降、連れてきたガキは全部まとめてその日の内に始末することにした。けど

「黙れ」

その一言でガルドが話すのをやめた。

しかしそれは飛鳥が発した言葉ではなくそのあまりにも冷たく恐怖をはらむかのようなドスのある声はさつきから放たれたものだった。

「ガルド、貴様にはギフトゲームをしてもらう。内容は貴様と私の対一の殺し合いよ。勝利条件は相手を死に至らしめること、敗北条件は死ぬこと。賭けるものは貴様はコミュニティの完全解散、こちらは貴様の悪行の黙認。もしこの条件が飲めないなら今此処で貴様を塵に変えてあげる。」

ガルドは放たれた威圧による恐怖から勢いよく首を縦に振る。するとガルドとさつきの前に二枚のギアスロールが現れた。

『ギフトゲーム名、〃 獣鬼の決闘 〃

- ・プレイヤー一覧、ガルドⅡガスパー
- ・クリア条件、ホストである弓塚・B・さつきの討伐
- ・クリア方法、自身のギフトによるホストの殺害
- ・敗北条件、プレイヤーが死んだ場合

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、〃 フォレス・ガロ 〃はギフトゲームに参加します。

〃\*\*\*\*\*〃印」

さつきはギアスロールを確認するとガルドに向けていた威圧を解いた。

「日時は明日、私がそちらに参ります、理解できたのなら明日のために準備をなさい。」

ガルドは何度も首肯くと脇目もふらずに走って消えて行った。

「ふう……まあ、やっちゃったモノは仕方ない！前向きに行こう」  
どうやらさつきは自身のやった事に後悔も反省もしていないようである。

はい、これが私のギフトです。

「な、なんであの短時間で“フォレス・ガロ”のリーダーと接触してしかも喧嘩を売る状況になったのですか!?”

「しかもゲームの日取りは明日!?”

「しかも敵のテリトリー内で戦うなんて!?”

「準備している時間もお金ありません!?”

「一体どんな心算があつてのことです!?”

黒ウサギの詰問が嵐のように次から次へと飛び出す。

「さつきさん、聞いていますのですか!?”

「ムシヤクシヤしたのでやりました。反省も後悔もしてません」

「黙らっしやい!!?”

黒ウサギは何処から出したのか、ハリセンでさつきを叩こうとするがさつきは一步下がることで回避する。

「別にいいじゃねえか。見境なく選んで喧嘩売ったわけじゃないんだから許してやれよ」

十六夜が黒ウサギをなだめる。

「い、十六夜さんは面白ければいいと思っているかもしれませんが、このゲームで得られるものは自己満足だけなんですよ?・この“ギアスロール契約書類”を見てください、しかも我がコミュニティから参加するのはさつきさん一人だけなんですよ」

黒ウサギはギフトゲームに参加するのがさつきだけであることを不安に感じていた。

\*\*\*

「それじゃコミュニティに帰ろうか」

「あ、ジン坊っちゃんには先にお帰りください。ギフトゲームが明日なら“サウザンドアイズ”に皆さんのギフト鑑定をお願いしないと。

この水樹の事もありますし」

さつき以外の三人は傾げて聞き返す。

「〃サウザンドアイズ〃？コミュニティの名前か？」

「YES。」サウザンドアイズ〃は特殊な〃瞳〃のギフトを者達の群体コミュニティ。箱庭の東西南北・上層下層の全てに精通する超巨大商業コミュニティです。幸いこの近くに支店がありますし」

「ギフト鑑定というのは？」

「勿論、ギフトの秘めた力や起源などを鑑定することです。自分の力の正しい形を把握していた方が、引き出せる力はより大きくなりま

す。皆さんも自分の力の出所は気になるでしょう？」

同意を求める黒ウサギに四人は複雑な表情をで返す。思う所はそれぞれあるが拒否する声はなく、黒ウサギ・十六夜・飛鳥・耀・さつき・レンの六人と一匹は〃サウザンドアイズ〃に向かう。

〃サウザンドアイズ〃に向かう一行は桃色の花を散らす並木道を歩く。

「桜の木・・・ではないわよね？花卉の形が違うし、真夏になっても咲き続けているはずがないもの」

「いや、まだ初夏になったばかりだぞ。気合いの入った桜が残っていてもおかしくないだろ」

「・・・？今は秋だったと思うけど」

「私の所は冬でした」

十六夜・飛鳥・耀の三人は顔をみ合わせて首を傾げる。

「皆さんはそれぞれ違う世界から召喚されているのです。元いた時間軸以外にも歴史や文化、生態系など所々違う箇所があるはずですよ」

「へえ、パラレルワールドってやつか？」

「近いですね。正しくは立体交差並行世界論というものなのですが、今からコレの説明を始めますと一日二日では説明しきれないのでまたの機会ということに」

ちょうど目的の店に着いたらしい。商店の旗には、蒼い生地に互いが向かい合う二人の女神像が記されている。

〃サウザンドアイズ〃の支店には日が暮れて看板を下げる割烹着の女性店員に、黒ウサギは

「まっ」

「待った無しです御客様。うちは時間外営業はやっていません」  
黒ウサギは悔しげに店員を睨みつける。

「なんて商売つけの無い店なのかしら」

「ま、全くです！閉店時間の五分前に客を締め出すなんて！」

「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます。出禁です」

女性店員は黒ウサギ達の文句に店への出禁を言い渡す。

「出禁!?これだけで出禁とか御客様舐めすぎでございますよ!!」

「なるほど、〃箱庭の貴族〃であるウサギの御客様を無下にするのは失礼ですね。中で入店許可を伺いますますので、コミュニティの名前をよろしいでしょうか？」

「……う」

言葉に詰まる黒ウサギ。

「相手が『ノーネーム』であることが解っていないながら名前を

「いいいやほおおおお！久しぶりだ黒ウサギイイイ！」

さつきが店員に言い返していると店の中から着物風の服を着た真っ白い髪の少女が奇声をあげながら黒ウサギに向かって爆走し、黒ウサギに抱きつきというフライングボディーアタックをかまし黒ウサギと一緒に反対側にある浅い水路まで吹き飛んだ。

「きゃあ——……！」

遠くなる悲鳴の後にポチャンと水路に落ちた。

「……おい店員。この店にはドッキリサービスがあるのか？なら俺も別バージョンでは非」

「ありません」

「なんなら有料でも」

「やりません」

十六夜は女性店員とコント、白夜又は黒ウサギにセクハラ、なにこれ。近くで見るとカオスなんだけど。

「し、白夜又様!?どうして貴女がこんな下層に!?!」

「そろそろ黒ウサギが来る予感がしておったからに決まっておるだ

ろに！フフ、フホフホホ！やっぱりウサギは触り心地が違うのう！  
ほれ、ここが良いのかここが良いのか！」

白夜叉は黒ウサギの胸に顔を埋めながら胸を揉みしだき始めた。

「し、白夜叉様！ちよ、ちよっと離れてください！」

黒ウサギは白夜叉を引き剥がし頭を掴んで投げる。

「ホラよ」

十六夜は飛んできた白夜叉をさつきにパスした。

「ちよ！」

さつきは飛んできた白夜叉を抱きしめるように受け止める。

「なんと、おんしも黒ウサギに負けず劣らず良い胸をしているの  
！！！・もしやおんしこれは着痩せか！」

「?!?!」

白夜叉は受け止めたさつきの胸に顔を埋め感觸を堪能しさつきを  
パニックにする。

「いやああああ！」

さつきは白夜叉の頭を掴むと顔を真っ赤にしながら吸血鬼の力で  
アイアンクローをした。

「あああ！忘れてた白夜叉はセクハラ変態駄神だった!!」

初対面の娘にも平気でセクハラするオヤジだったの忘れてた！女  
だけど!!

「ぬおおお!!割れる割れる割れるおんし止め、すまぬ謝る！だか  
ら放してくれえええ！」

白夜叉の絶叫が響き渡る。

それを聞いたさつきは白夜叉から手を放し地面で頭を抱える白夜  
叉を自身の胸を守るように抱きながら変質者を見るような目で睨む。

「オーナー、今のは流石に擁護できません」

「そうね、今のは弓塚さんが正しいわ」

女性店員と飛鳥の二人も白夜叉にフォローをしなかった。

「まさか私がアイアンクローを受ける日が来るとは」

「それで。貴女はこの店の人？」

「おお、そうだと。この“サウザンドアイズ”の幹部様で白夜叉

様だよご令嬢。仕事の依頼ならおんしのその年齢の割に発育がいい胸をワンタツチ生揉みで引き受けるぞ」

白夜叉が懲りずに飛鳥にセクハラ発言をすると後ろから威圧感を伴った指の鳴る音がする。

「と思ったが商売人たるものそんな事ではいかんな」

白夜叉は舌の根も乾かぬ内に前言を撤回する。

黒ウサギが水路から上がってきた。

「うう……まさか私まで塗れる事になるなんて」

「因果応報……かな」

『お嬢の言う通りや』

「まあいい。話しがあるなら店内で聞こう」

「よろしいのですか？彼らは旗も持たない『ノーネーム』のはず規定では」

「『ノーネーム』とわかっていながら訪ねた性悪店員とちよつとスキンスリップが行き過ぎた私からの詫びだ。身元は私が保証するし、ボスに睨まれても私が責任を取る。いいから入れてやれ」

白夜叉と女性店員のあとに続いて六人と一匹は暖簾くぐった。

「生憎と店は閉めてしまったのでな。」

私の私室で勘弁してくれ」

全員が座るのを確認すると口を開いた。

「もう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の門三三四五外門に本拠を構えている『サウザンドアイズ』幹部の白夜叉だ。この黒ウサギとは少々縁があつてな。コミュニティが崩壊してからもちよくちよく手を貸してやっている器の大きな美少女である」

「はいはい、お世話になっております本当に」

「その外門って何？」

「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。数字が若いほど都市の中心部に近く、同時に強大な力を持つ者達が住んでいるのです。外門を上から見たらこうゆう感じですよ」

黒ウサギが箱庭の外門を上から見た図を簡単に書く。

「……超巨大タマネギ？」



「いえ、超巨大バームクーヘンではないかしら？」

「そうだな。どちらかといえばバームクーヘンだ」

「そういえば、最近バームクーヘン食べてないかも」

そんな見も蓋もないような感想にガツクリと肩を落とす黒ウサギ。だが対照的に白夜叉は呵々と哄笑を上げて二度三度と頷いた。

「さて、それで？水樹を持つておると言うことは蛇神の試練をクリアしたのだろう？一体誰が、どのようなゲームで勝ったのだ？知恵比べか？勇気を試したのか？」

「いえいえ。この水樹は十六夜さんがここに来る前に、蛇神様を素手で叩きのめしてきたのですよ」

自慢げに黒ウサギが言うと、白夜叉は声を上げて驚いた。

「なんと?! クリアではなく直接的に倒したとな?! ではその童は神格持ちの神童か？」

「いえ、黒ウサギはそう思えません。神格持ちなら一目見れば分かるはずです」

「ねえ、白夜叉はその十六夜が倒したって蛇神と知り合いなの？」

「知り合いもなにも、アレに神格を与えたのはこの私だぞ。もう何百年も前の話しだかの」

それを聞いた十六夜達が白夜叉に勝負を挑み。白夜叉はそれを面白半分にする。

「おんしらが挑むのは『挑戦』か？——それとも『決闘』か？」

すると部屋にいた者が居たのは白夜叉の私室である和室ではなく白い雪原に凍る湖畔——そして、水平に太陽が廻る世界だった。

白夜ですか、なんとも私殺しな場所に転移してらっしゃいますよ。もし私が太陽を曲りなりにも克服していなかったら私死んでますよ。

「今一度名乗り直し、問おうかの。私は『白き夜の魔王』——太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんしらが挑むのは、試練への『挑戦』か？それとも対等な決闘か？」

周りを見渡し納得がいったのか。

「参った。やられたよ。降参だ、白夜叉」

「そうか、それは試練を受けると言うことだな、他の童達も同じか

？」

「……ええ。私も試されてあげてもいいわ」

「右に同じ」

「その童には私も含まれているのかな？」

「いや、おんしは含まれておらんよ」

「そう」

白夜叉は試練として勇気を試すゲームを記す。

「ねえ白夜叉、このゲーム私の名前が書かれてないんだけど？」

まさか私だけ別ゲームなんて事無いよね。

「おんしには個別で試練を受けてもらうゆえ心配するでない」

ですよね。

「おい待てよ白夜叉。なんでメイドだけ個別なんだ？」

「なんでか……それはのおんしらの中でこの娘が一番強いからだの。文句は聞かんぞ？この娘の試練はおんしらより数段上の内容だからの」

「そうかよ、それじゃメイド様の実力とやらを見させて貰おうじゃないか」

三人の試練は耀が受ける事になり無事に試練を乗り越える事に成功し、耀は新しい力を試練の相手であるグリフォンから受け取った。

「試練をクリアしたおんしらには」<sup>ギフト</sup>恩恵<sup>ギフト</sup>を与えねばならん。ちよいと贅沢だがコミュニケーション復興の前祝いとしては丁度良からう」

白夜叉が柏手を打つ。すると五人の眼前に光り輝く五枚のカードが現れる。

〃コバルトブルーのカードに逆廻十六夜・ギフトネーム<sup>コード・アンノウ</sup>〃 正体不明

ワインレッドのカードに久遠飛鳥・ギフトネーム<sup>威光</sup>〃

パールエメラルドのカードに春日部耀・ギフトネーム<sup>ゲノム・ツリ</sup>〃 生命の目録〃

〃ノーフォーマー〃

トワイライトオレンジのカードに弓塚・B・さつき・ギフトネーム<sup>ロード・オウ・ヴァンパイア</sup>〃 死徒二十七祖〃

ドレイン・カードン  
“ 枯渴庭園 ”

“ 千年城・ブリュンスタッド ”

ブリュンスタッド  
“ 朱い月 ”

“ MELTY BLOOD ”

“ ゲイ・ボルク×二 ”

“ 全て遠き理想郷 ”

“ 約束された勝利の剣 ”

ミッドナイトブルーのカードにレン・ギフトネーム

“ 夢魔 ”

“ MELTY BLOOD ”

それぞれの名とギフトが記されたカードを受けとる。

「ギフトカード！」

「お中元？」

「お歳暮？」

「お年玉？」

「商品券？」

「ち、違います！というかなんで皆さんそんなに息が合っているのですか?！」

「ここは乗ったほうがいいかなって」

「そのギフトカードは、正式名称を”ラプラスの紙片”、即ち全知の一端だ。そこに刻まれるギフトネームとはおんしらの魂と繋がったギフトの名称。鑑定は出来ずともそれを見れば大体のギフトの正体が分かるというもの」

十六夜は自身のギフトが不明になっていることに満足し白夜叉はギフトカードがエラーをおこした事について思考を始める。

「白夜叉、私まだ試練を受けてないんだけど貰っていいの？」

「ん？おお、そうだなさておんしが受ける試練はこれだ」

『ギフトゲーム名“ 白夜への自己の証明 ”

・プレイヤー一覧 弓塚・B・さつき

・クリア条件 白夜の地平からの脱出

・クリア方法 己のギフトを使い白夜の地平から脱出すること

敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の元ギフトゲームを開催します。

“サウザンドアイズ”印』

白夜の地平からの脱出か、なら武器三つは使えない。MELTY BLOODは恐らく戦闘系、朱い月はそもそも私じゃ使えない。枯渴庭園は周りを巻き込むから・・・千年城か。

『千年城・ブリュンスタッド』

さつきが言葉を紡ぐと白夜が夜に変わり星が瞬き、太陽は月となり、雪原は草原に変化し、凍った湖畔は巨大な城に変わった。

「なんと?! 私のゲーム盤を上書きするとは」

「へえ、これはこれで雄大：いや荘厳な場所だな。これがメイド様のギフトか?」

「ええ。これは私のギフトの一つ」千年城・ブリュンスタッド。私が住んでいた場所」

「ブリュンスタッドじゃと!! おんしまさか朱い月の眷属か!!」

「えっと眷属というよりは孫みたいなものかな?」

私の親元のロアの親元がブリュンスタッドだから孫でいいよね。

「おい、俺達にも分かるように説明しろよ」

十六夜に説明を求められて落ち着きを取り戻す白夜叉。

「そうだな、箱庭には二つの吸血鬼が存在しておる。一

つが太陽の主権の一つ、蛇使い座のドラクレア。

二つ目が月の主権一つ、朱い月の名を冠するブリュンスタッドだ。

ドラクレアが騎士と呼ばれるのに対しブリュンスタッドは月姫と呼ばれておる。」

(しかしあの天然娘に孫がおったとはの。何もなければよいが)

「じゃあメイドはメイドじゃなくてメイド姫だったって訳だ」

「あのさあ十六夜そのメイド呼び何とかならない? 私いつもメイド服着てる訳じゃないんだけど」

「じゃあ孫姫だな」

孫姫・・・まあいいか。

\*\*\*

「今日はありがとう。また遊んでくれると嬉しい」

店から出た黒ウサギ達七人と一匹は店先で再戦を誓い“ノーネーム”に向かった。

\*\*\*

「この中が我々のコミュニティでございます。しかし本拠の館は入口から更に歩かねばなりません。この近辺はまだ戦いの名残があることをご容赦ください。」

黒ウサギ達は敷地内に入ってその光景に息を飲んだ。

「・・・おい、黒ウサギ。魔王のギフトゲームがあつたのは——今から何百年前の話だ」

「僅か三年前の話でございます」

「ハッ、そりや面白いな。この風化しきつた町並みが三年前だと」

「・・・断言するけどどんな力がぶつかつてもこんな壊れ方はない。「あり得ます」・・・なに？」

「あり得ます、この惨状は私の庭と同じです」

「どういうことだ？孫姫の庭と同じってのは」

「私ならこの惨状を数分で再現できるといふことです。もう行きましょう、ここは見ていて辛い」

「この惨状を作り上げた魔王——それを数分で再現できると言つた孫姫・・・ハッいいぜいいぜいいオイ。想像以上に面白そうじゃねえか・・・！！」



はい、お風呂は至高です。

ガルドは自分の屋敷で痛そうに頭を抱えていた。

(やつちまった・・・黒ウサギを手に入れようとして取り返しのかねえ事に・・・！)

「くそ・・・くそくそくそドクショウがあ!!」

ガルドは近くにあった机を窓の外に放り出した。

「あの女・・・威圧感だけで死を連想させやがった。七桁に居ていい類いじゃねえ、勝てる気が全くしねえ」

頭を抱えているガルドに、割れた窓の向こうから凜とした女の声がかかる。

「――ほう。箱庭第六六六外門に本拠を持つ魔王の配下が〃名無し〃風情に負けるのか。それはそれで楽しみだ」

「っ、誰だ!？」

現れたのは華麗な金の髪を靡かせた女性だった。

「情けない。三桁の外門の配下がコレとは。こうも情けないと同情してしまうよ」

「テメエ・・・どこのごいつか知らねえが、俺は今気が立っているんだ。牙を剥かねえうちにとつとと失せろ」

「ふふ。威勢がいいな、だが獣からの成り上がりが〃鬼種〃の純血である私に牙を剥くのか?」

「き、〃鬼種〃の純血だと・・・!?馬鹿を言え、鬼種の純血と言えばほとんど神格じゃねえか!〃名無し〃の先兵か、なんのようだ!」

「まあ、待て虎よ昼間の事は聞き及んでいる。つまりだ、お前が明日のゲームに勝てば全ての問題は解決されるのであろう」

「勝てるわけねえだろうが!知ってんだろ!俺はあのガキどもにも手も足も出なかったんだ!!」

「確かに今のお前では勝てないだろう、しかしお前が新たなギフトを・・・〃鬼種〃のギフトを手に入れたらどうする?勝ち目も出てくるのではないか?」

「・・・。俺に〃六百六十六の獣〃を裏切れと?」

「結果的にはそうなるな」

「・・・一つ聞きたい。あんたのコミュニケーションはどこだ？」

「それは言えん。私は月の出ているうちに帰る」

「チツ。選択肢はねえか・いいぜ。けど時間がない。種族そのものを変質させるにはどれくらいかかる？」

「なに、一分もかからんよ」

金髪の女はガルドの胸倉を掴むと首筋を食い破った。

（ヴァ、ヴァンパイアの純血——箱庭の騎士 だと!? この女、まさか!）

「先に断るが騙してはいないぞ。私は確かに鬼種のギフトを与えたのだからな」

そう言うと女は窓から姿を消した。

夜の箱庭を飛びながら女は思い出したように

「そう言えば」ノーネーム 側も吸血鬼だということを伝えていなかったな。うっかりしていた。まあ結果は変わらないだろう・・・しかしブリュンスタッドの縁者か、さてどれ程のものか楽しみだ」

\*\*\*

「——」ノーネーム 住居区画、水門前。

六人と一匹は廃墟を抜け、貯水池に向かう。貯水池には先客の子供たちが清掃道具を持って水路を掃除していた。

「黒ウサのねーちゃんお帰り!」

「眠たいけどお掃除手伝ったよー」

「ねえねえ、新しい人達って誰!？」

「強いのか?! かつこいい!？」

「YES! とても強くて可愛い人達ですよ!」

二十人前後の子供たちが集まって来る。

（マジでガキばつかな。半分は人間以外のガキか?）

（じ、実際に目の当たりにすると想像以上に多いわ。これで六分の



「ですって？」

(……私、子供嫌いなのに大丈夫かな?)

(今のコミュニケーションの惨状でこの子たち誰も目が死んでないなんて。この子達とても真っ直ぐなのね)

(……)

五人はそれぞれ違う感想を心の中で呟く。一人は無言ではあつたが。

「右から逆廻十六夜さん、久遠飛鳥さん、春日部耀さん、弓塚さつきさん、レンさんです。皆も知っている通り、コミュニケーションを支えるギフトプレイヤーです。」

「二よろしくお願いします！」

キーン、と耳鳴りがするほどの大声で二十人前後の子供達が叫ぶ。

「ハハ、元気がいいじゃねえか」

「そ、そうね」

「やっぱり子供は元気が一番ね」

(……本当にやつていけるかな、私)

ヤハハと笑う十六夜、子供達に慈愛の眼差しを向け始める吸血鬼なさつき(子持ち)、さつきの後ろに隠れるレン、飛鳥と耀はなんとも言えない複雑な表情をしてはいたが。

「さて、自己紹介も終わりましたし！それでは水樹を植えましょう！黒ウサギが台座に根を張らせるので十六夜さんはギフトカードから出してくれますか？」

「あいよ」

「それでは苗の紐を解いて根を張ります！十六夜さんは屋敷への水門を開けてください！」

「あいよ」

十六夜は貯水池に下りて水門を開ける。黒ウサギが苗の紐を解くと、根を包んでいた布から大波のような水が溢れ返り、激流となって貯水池を埋めていった。

「ちよ、少しはマテやゴラア!!流石に今日はこれ以上濡れたくねえぞオイ！」

水門の鍵を開けていた十六夜があわてて石垣まで跳躍する。その後も十六夜とジンが言い争いをしたりしていたが概ね平和的に解決したようだ。

\*\*\*

屋敷に着いた頃には既に夜中になっていた。月明かりのシルエツトで浮き彫りになる本拠はまるでホテルのような巨大さである。

「遠目から見てもかなり大きいけど・・・近づくと一層大きいね。何処に泊まればいい?」

「コミユニティの伝統では、ギフトゲームに参加できる者には序列を与え、上位から最上階に住む事になっております・・・けど、今は好きなどころを使っていたいただいて結構でございますよ。移動も不便でしょうし」

「・・・お風呂入りたい」

耀が呟く。

レンは喋れないので無言だったが他の四人は言い方は違うものの纏めると『今はともかく風呂に入りたい』と同調する、さつきとレンは違うが十六夜達三人は湖に落とされて一度ずぶ濡れにされている(十六夜は二度だが)ため早く風呂に入りたいのだ。

大浴場に着いた一行、黒ウサギが湯殿の扉を開ける。

黒ウサギがしばらく使われていなかった大浴場みて真っ青になり。

「一刻ほどお待ちください!すぐに綺麗にいたしますから!」

と叫んで掃除に取りかかった。それはもう凄惨な事になっていたのだろう。

「手伝いますよ黒ウサギ」

さつきが掃除の手伝いをかっ出て出る。

「そんな!手伝っていたただかなくてもここは黒ウサギが」

「二人より二人、早く終わればその分早くお風呂に入れるから、ね」

十六夜達三人は既に各自の部屋に行ったのか居なくなっていた。

\*\*\*

黒ウサギとさつきのお風呂掃除とお湯張りも終り女性四人とレン十三毛猫は大浴場で体を洗い流し、湯に浸かってようやくといった感じで人心地ついたように寛いでいた。

「本当に長い一日でした。まさか新しい同士を呼ぶのがこんなに大変とは、想像もしておりませんでしたから」

「それは私達に対する当て付けかしら？」

「め、滅相もございません！」

慌てて否定する黒ウサギ。

「それにしても、これはちよつとした温泉気分ね。好きよ、こういうお風呂」

「ところで御三人様。こうして裸のお付き合いをしているのですし、良かったら黒ウサギも御三人様の事を聞いてもいいですか？ご趣味や故郷の事ナド」

「あら、そんなもの聞いてどうするの？」

「それはもう、黒ウサギの好奇心というやつでございますヨ！ずっとずっと待ち望んでいた所謂ガールズトークというやつです♪」

「・・・ガールズトーク」

飛鳥達三人は気が乗らないような顔をする。（耀は気が乗らないがガールズトークに多少揺れているようだ）

飛鳥と耀は『家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い』と手紙に書かれていたためその捨ててきたものを今更顧みるような真似は、なるべくしたくない。

さつきは生きてきた年月もそうだがその内容も内容で一般人、例えば多少ずれた人生を送っていたとしても理解の外にある人生を送っているために話す中身に気を遣わなければならぬ。（気を遣っても重い内容になりそうだが）

「けど、そうね。これから一緒に生活する仲だもの障りない程度なら構わないわよ」

「私はあまり話したくない。けど、質問はしたい。黒ウサギには興味ある。髪の色が桜色になるなんて、ちよつとカッコイイ」

「あやや、黒ウサギってばカツコイイですか？」

「それなら私も気になっていたところよ。ならお互いに情報交換、ということでもいいかしら」

「それならまずは誰から情報提供する？別に私からでもいいけれど」

「おや、さつきさんからですか？それではお願いします。それで？さつきさんは吸血鬼のことですがどのような御生活を」

「生活、ね。私は最初は何処にでもいる唯の人間だったんだけど十七歳の時に死んだのよ」

「し、死んだ？でも弓塚さんは今生きてるのよね？」

(いきなり、重い内容になってしまったのですよ)

「生きてるよ、まあ死んだんだけど私には才能があったのか数時間で生き返ったの。だけど法的には私は死んだことになったのよ」

「・・・もしかしてさつきさんは人間から吸血鬼になったのですか？」

「正解、吸血鬼になって日光を受けられなくなって日の射さない路地裏で生活してたら死んだことになってたの。だいたい三年ぐらかな？一年目に私を殺した吸血鬼を消滅させて独立。二十歳の時に初恋の相手と非公式の結婚したの。戸籍上は私死んでるしね。その後は妊娠して出産して子育てして夫が死んで子供が家を出てからは世界を旅をしていたわ」

「さつきさんの世界では成り上がりの吸血鬼は繁殖することができるとですか？」

「できるけどする吸血鬼はほとんどいないわね。出産経験のある女性吸血鬼なんて1%切ってるんじゃないかな。もしかして箱庭の吸血鬼は成り上がりだと繁殖できない？」

いや、出来ないのは知ってるけど、確かマンダラだかマンドラだかが吸血鬼化して繁殖能力を失っただっけ？

「YES、その通りでございます。つと重い話は横に置いておいておきまして、さつきさんは日光を受けられなくなったとおっしゃいましたが今のさつきさんは日光を克服しているみたいですが何か理由でもっ？」

黒ウサギは聞きたかったことを聞いた。

「理由はね．．．」  
と女性四人でのガールズトーク？も盛り上がりかましい入浴は  
過ぎていった。

はい、虎狩りと箱庭の吸血鬼です。

お風呂から上がった娘四人は（娘四人？）

パジャマ代りに用意されたネグリジエ着て、明日からの着替えのために黒ウサギの部屋までやって来ていた。（ちなみにレンは早々にお風呂から上がり既にさつきの部屋で就寝中である）

「せっかくこんな素敵な世界に来たんだもの。相応の衣装を普段着に使っても問題はないでしょう?」

「それは勿論でございます。しかし、黒ウサギの衣装棚に飛鳥さんの気に入るようなものがあるかどうか……」

ゴソゴソ。衣装棚を漁る黒ウサギ。

ふつと飛鳥の視線が泳ぐと、奥にあるクローゼットが目にと留まった。

それに気づいた黒ウサギは、妙案を思い付いたとばかりにウサ耳を跳ねさせる。

「そういえばあのクローゼットには審判時に着用を求められた衣装が……!」

クローゼットを開く黒ウサギ。其処には様々なコスチュームが飾られていた。

「飛鳥さんはワンピースですか? ツーピースですか?」

「どちらかといえばワンピースの方かしら」

「そうですねー♪ 黒ウサギもワンピースの方が好きです。スカートはどうです?」

「特にこだわりは無いけど…… 黒ウサギの丈は、少し恥ずかしいわ」

「うう、そうですね。黒ウサギもロングスカートの方が好みでございます……」

ゴソゴソとあれでもないこれでもないと手当たり次第に衣類を取り出しては投げ捨てていく黒ウサギ。そして

「あ、コレなんていかがでしょう!」

バサア、と広がる深紅の衣装。ワンピースのロングスカート――

—というよりは、完全にドレススカートそのものである。

「……これを普段着に？」

耀はあまりの派手さに瞳を瞬かせる。

「あら、素敵じゃない？ 私はこういう衣装も好きよ」

意外と好感触の飛鳥は、ネグリジエを脱いで早速その場で服を着替える。

「この衣装は審判用に白夜叉様から戴いたものでございます。ウサギ達はご依頼があれば審判とともに進行役としてゲームを盛り上げる仕事もございます。ですので審判用の衣装には身を守る為の加護が付属されております」

飛鳥はそこでようやく黒ウサギの意図を理解した。唯の華美装飾な衣装というだけでなく、ギフトとしての加護が宿るこのドレスならば、普段着にも有事の際にも着ていられると思つてのことだろう。

ドレスを着たまま一歩、二歩と飛鳥はステップを踏む。

足元まで伸びる美麗なレースの布地は飛鳥のステップに合わせて踊るように舞い、着ることで逆に身軽さを感じるような錯覚があった。

「……驚いたわ。こんなに凄く動きやすいスカートは始めて——」

「ふふ、当然でございます！ 何といつてもこの衣装は、」

「——だけど、胸が余るわ」

へ？と言葉を無くし、飛鳥の胸からのボディラインを凝視する黒ウサギ。

飛鳥も十五歳の少女にしては発育がいいのだが、黒ウサギの発育に比べたらまだ幼い。

一見して少女のような黒ウサギだが、豊満な胸と臍から臀部にかけての女性らしい肉付きは理想的なボディラインを描いている。

辛うじて胴回りは同じサイズのようにだが、ドレスの胸の部分は完全に余っていた。

黒ウサギは慌ててフォローを入れる。

「あやや、こ、これは……！ え、えーとですね！ こ、今晚のうちに服のサイズを飛鳥さんに合わせておきますので！ 明日出る時には

間に合うかと」

「……そうね、お願いするわ」

複雑な表情で承諾する飛鳥。口にはしないものの、言いようのない敗北感があった。たとえ問題児であっても、乙女であることには違いない。

「さつきさんの衣装はどうしましょう?」

黒ウサギは次にさつきの衣装を選ぶ為に物色し始める。

「えーと。黒ウサギ、ことうゆう服ってある?」

さつきは黒ウサギに指定した服があるか聞いた。

(\*艦コレの三越榛名参照)

「少々お待ちください。確かこの辺に……あ、ありました!コレなんてどうです?」

黒ウサギはさつきに取り出した衣装を見せる。

「これは飛鳥さんの衣装と同じ加護が付属されている衣装です。黒ウサギには少し大きめですのでさつきさんにはちようどよろしいかと」

「黒ウサギ、スカートはこれがいいかしら?」

飛鳥が黒ウサギが放り出した衣類から灰色のスカートを取り出す。

「それです!飛鳥さんありがとうございます」

そろった衣装にさつきが着替える。

「どうかな?サイズはちようどいいけど」

「とても良くお似合いですヨ!さつきさんの仕立て直す必要はないようデスね」

さつきと飛鳥の衣装も決まり、四人は明日に向けて解散したのだった。

\*\*\*

——翌日、箱庭二一〇五三八〇外門。ペリベッド通り・噴水広場前。

飛鳥、耀、さつき、十六夜、ジン、そして黒ウサギと三毛猫は「フオレス・ガロ」のコミュニティの居住区を訪れる道中、「六本傷」の旗



が掲げられた昨日のカフェテラスで声をかけられた。(レンはお留守番)

「あー！昨日のお客さん！もしや今から決闘ですか!？」

『お、鉤尻尾のねーちゃんか！そやそや今からこの姉ちゃんの討ち入りやで！』

ウエイトレスの猫娘が近寄ってきて、さつき達に一礼する。

「ボスからもエールを頼まれました！ウチのコミュニティも連中の悪行にはアツタマきてたところですよ！この二一〇五三八〇外門の自由区画・居住区画・舞台区画の全てでアイツらやりたい放題でしたもの！二度と不義理な真似が出来ないようにしてやってください！」

ブンブンと両手を振り回しながら応援する鉤尻尾の猫娘。

「ええ、勿論です。区画ごと燃やす勢いで闘いますよ」

「おお！心強い御返事だ！」

満面の笑みで返す猫娘。だがしかし、急に声を潜めてヒソヒソと呟く。

「実は皆さんにお話があります。『フォレス・ガロ』の連中、領地の舞台区画ではなく、居住区画でゲームを行うらしいんですよ」

「舞台区画だろうと居住区画だろうと変わらない結果を持って帰りますから心配しなくても大丈夫ですよ」

さつきはまるで未来は既に決定しているかのような口ぶりで猫娘の頭を撫でる。

\*\*\*

「あ、皆さん！見えてきました・・・けど」

黒ウサギは一瞬目を疑った。それというのも、居住区が森のように豹変していたからだ。ツタの絡む門をさすり、鬱葱と茂る木々を見上げて耀は。

「・・・ジャングル？」

「虎の住むコミュニティだしな。おかしくはないだろ」

「木々が生い茂っているならやり易いわ」

さつきはゲームテリトリー内に入っていく。

「行つてしまいました。大丈夫でしょうか？」

「大丈夫よ、昨日の話で弓塚さんのギフトなら問題ないつてなつたでしょう」

「そうですか」

「それに、もしもの時はあの剣がある」

「あの剣？孫姫のギフトには剣があるのか？」

「ええ、世界で恐らく最も有名な聖剣、約束された勝利の剣を弓塚さんは持っているわ」

「おいおいちよつとまって!?約束された勝利の剣だ?!あれはアーサー王伝説に出てくる剣だろ!?なんで孫姫が伝説の聖剣なんて持つてんだ」

「さあ？弓塚さんは旅をしている時に湖の貴婦人から貰つたつて言つていただけ」

「貰つたつて・・・何者だよあの姫様。吸血鬼だったり聖剣持つてたり。ゲームなら設定過剰でボツになるぞ」

「ちなみに既婚者で子持ちだそうよ」

「マジで設定過剰だな、これで黒ウサギと同じ見ためと年齢が合つてなかつたりしたら笑えるぜ」

「二・・・二」

十六夜の言葉に黒ウサギ達女性陣は目を反らす。

「マジかよ。まさかと思うが黒ウサギより上か？」

黒ウサギにジト目を向ける十六夜。

「い、YES・・・黒ウサギよりも年上なのですよ」

黒ウサギが十六夜の視線に負けさつきが自身より年上であることを明かす。

「？焦げ臭い」

耀の一言で十六夜と黒ウサギは会話を辞め。十六夜は耀を黒ウサギは飛鳥とジンを抱えて門の上に飛び乗り、区画内を見る。

「燃えてるな」

「ええ、燃えているわね」

「うん、凄い燃えてる」

区画内を見た十六夜達の目の前には火の粉を巻き上げ煌々と燃え盛るジャングルがあった。

\*\*\*

少し時間を遡り、さつきはジャングルの中を歩いていた。

「ここらへんがいいかな」

足を止めたさつきは指を空中に走らせルーンを刻む。

すると一本の木が燃え出した。さつきはすかさず別のルーンを刻む。すると火は炎と成り、辺りを燃やしていく。さつきはそれを四度ほど繰り返しおこなった。

四度繰り返し行われたルーンにより辺りは森林火災とみまごうばかりに燃え広がっていた。

さつきは燃え盛る森の中、全身を炎の赤にそめながらまるで散歩でもするかのようにガルドのいる館に歩いていった。

\*\*\*

ガルドは冷静だった。冷静といっても獣としての冷静であり、理性や知性は既に鬼化したことで失われていた。館にいたガルドは微かに漂ってきた何かが焼ける匂いに館の外で何かが起きていることを感じとり館を出るために駆け出す。

ガルドが館を出ると自身の縄張りの森が炎に包まれている光景が瞳にうつる。

ガルドは縄張りを燃やされた怒りの咆哮をあげると燃え盛る炎の中にあってしっかりと感じ取れる気配に向かって全力で駆け出した。

ガルドが気配に向かって走り出してから一分ほどで気配の元である女が視界に入った。女は炎の赤に全身を染めながら真っ直ぐガルドに向かって歩いてくる。距離にして約二百メートルの直線、ガルドは女を殺すために脚により力を込めて走る。二人の距離が約五十メートルに差し掛かった時、ガルドの視界から女が突如として消えた。次の瞬間ガルドは自身の目を疑った。何故自分の軀が見えてい

る！そんな驚きに支配されていると視界の隅に女の姿があった。女はこちらに半身を向けながら手に着いた恐らく自分の血を恐ろしくも妖艶な笑みを浮かべながら嘗めていた。ガルドが見た女の目はただの赤色ではなく、まるで血の朱のような煌めく瞳をしており、それを見てしまったガルドは消えていた知性を取り戻し、そして自身はまだ幼い子供のころに親に言われたことを思い出した。

“朱い瞳を持ち血を嘗めながら嗤う吸血鬼には関わるな”。ガルドは今、目の前にいる女がまさしく朱い瞳を持ち自分の血を噛いながら嘗めている光景を目にしている、そして自分が何にゲームを挑まれたのかを理解し、そこでガルドの意識は闇に落ちた。

\*\*\*

さて、ガルドも殺したし館に行こうかな、確か原作だと、このゲームで飛鳥は銀の剣を借りパクしていたから 館のどつかに有ると思うけど？初期の飛鳥にはあれがちょうどいいし。私の槍を貸してもいいけど、使いこなすなんてまず無理だろうし。

そう独り言を言いながらさつきは館に向かって歩き出した。

\*\*\*

ピクッ

黒ウサギの耳が何かに反応するように揺れた。

「皆さん、ゲームの決着が着きました！ガルドの死亡を以て”ノーネーム”側の勝利です！」

黒ウサギは箱庭の中枢からの判定を十六夜達に知らせる。その数分後にさつきが散歩から帰ってきたかのように何事も無く帰ってきた。

「区画ごと燃やす勢いとは言っていたがまさか跡形もなく燃やし尽くすとは思って無かったぜ」

「ええ、何かの比喻だと思っていたわ」

\*\*\*

ゲームがおわり、”フォレス・ガロ”の解散令が出た。

“フォレス・ガロ”に誇りを奪われた者達が自分達の“名”と“旗印”が返ってくるを知り群がるのを十六夜が叱責する。

\*\*\*

その後、本拠に戻った十六夜達は談話室に集まっていた。

「ガルドの件はこれで終わった。それで、例のゲームはどうなった？」

“ノーネーム”のメンバーは仲間が景品に出されるゲームのことを話していた。

「ゲームが延期？」

「はい・・・申請に行った先で知りました。このまま中止の線もあるそうです」

黒ウサギはウサ耳を萎れさせ、落ち込んでいる。

「なんてつまらない事をしてくれるんだ。白夜叉に言ってどうにかならないのか？」

「どうにもならないでしょう。どうやら巨額の買い手が付いてしまったそうですから」

十六夜の表情は目に見えて不快そうに変わった。人の売り買いに対する不快感ではない。一度はゲームの景品として出したものを、金を積まれたからといって取り下げた事に対してだ。

「チツ。所詮は売買組織ってことかよ。エンターテイナーとしちや五流もいいところだ。“サウザンドアイズ”は巨大コミュニティじゃなかったのか？プライドはねえのかよ」

「仕方ないですよ。“サウザンドアイズ”は群体コミュニティです。白夜叉様のように直轄の幹部が半分、傘下のコミュニティの幹部が半分です。今回の主催は“サウザンドアイズ”の傘下コミュニティの幹部“ペルセウス”。双女神の看板に傷が付く事も気にならないほどのお金やギフトを得れば、ゲームの撤回ぐらいやるでしょう」

「ペルセウスの名前を持つ人はどこの世界でもクズね」

さつきは小声でボソリと呟く。

「それで？その仲間ってのはどんな奴なんだ？」

「そうですね・・・一言で言えば、スーパープラチナブロンドの超美人さんです。指を通すと絹糸みたいに肌触りが良くて、湯浴みの時に濡れた髪が星の光でキラキラするのです」

「へえ？よくわからんが見応えはありそうだな」

「それはもう！加えて思慮深く、黒ウサギより先輩でとても可愛がってくれました。近くに居るのならせめて一度お話ししたかったのですけど・・・」

「おや、嬉しい事を言ってくれるじゃないか」

今この場に居ないジン以外の五人は声のした窓の外を見た。コンコンと叩くガラスの向こうで、にこやかに笑う金髪の少女が浮いていた。黒ウサギは慌てて窓に駆け寄り窓を開ける。

「レ、レティシア様!？」

「様はよせ。今の私は他人に所有される身分。」箱庭の貴族「ともあろうものが、モノに敬意を払ってでは笑われるぞ」

レティシアと呼ばれた金髪の少女は苦笑しながら談話室に入る。

美しい金の髪を特注ので結び、紅いレザージャケットに拘束具を彷彿させるロングスカートを着た彼女は、黒ウサギの先輩と呼ぶには随分と幼く見えた。

「こんな場所からの入室で済まない。ジンには見つからずに黒ウサギと会いたかったんだ」

「そ、そうでしたか。あ、すぐにお茶を淹れるので少々お待ちくださいー!」

久しぶりに仲間と会えたことが嬉しかったのか、黒ウサギは小躍りするようなステップで茶室に向かう。

「それに、キミとも話してみたかったんだ。外から来た吸血鬼であるキミと」

「私とですか？外様の吸血鬼である私に箱庭の騎士である貴女が話してみたいなんて」

「なに、外様等ではないさ。ブリュンスタッドは箱庭の上層では色んな意味で有名でな。その縁者が箱庭に来たとあれば同じ吸血鬼として会ってみたいと思うのは当然というものだ」

「私、ブリュンスタッドの名を名乗った覚えはないはずですが。……白夜叉さんですねレティシアさんに私がブリュンスタッドの名前を持つていることを話したのは」

「ただいま戻りました！」

紅茶のティーセットを持った黒ウサギが戻ってきた。

「それで、レティシア様はどのようなご用件ですか？」

「用件というほどのものじゃない。新生コミュニティがどの程度の力を持っているのか、それを見に来たんだ」

「そういや、白夜叉の奴が言っていたな箱庭には二種類の吸血鬼がいるんだったか。確か太陽と月の主権とやらを持っているんだったな。それで孫姫はどうだったよ」

「生憎、ガルドでは当て馬どころか物差し役にも立たなかったよ。他の者はゲームに参加していないので判断に困る。……こうして足を運んだ方がいいが、さて。私はお前達に何と言葉をかければいいのか」

「なら、やることはひとつだろ」

「何？」

「実に簡単な話だ。自分の力で確かめればいい——だろ」

「ふふ、……なるほど。それは思いつかなんだ。実に分かりやすい。下手な策を弄さず、初めからそうしといればよかつたなあ」

「ちよ、ちよつと御二人様？」

「ゲームのルールはどうする？」

「どうせ力試しだ。手間暇かける必要もない。双方が共に一撃ずつ撃ち合い、そして受け合う」

「地に足を着けて立っていたものの勝ち。いいね、シンプルイズベストって奴？」

十六夜とレティシアはそう言いながら中庭に飛び出した。さつきと黒ウサギもそれに続いて窓から外にでる。窓から外に出た四人ほどの運動能力のない耀と飛鳥は中庭に続く玄関から出るために走り出した。

耀と飛鳥が中庭に着いて見たのはレティシアに迫る塊状の何かと

それを払い落とす黒ウサギの姿だった。

\*\*\*

レテイシアによる力試しもおわり中庭から屋敷に戻ろうとする黒ウサギ達六人。その時褐色のひかりが六人に迫る。レテイシアが黒ウサギ達を庇うように前に出た。

「ゴーゴンの首を掲げた旗印……だ、駄目です！避けてくださいレテイシア様！」

黒ウサギが叫ぶが、もう間に合わない、そう誰もが思った、たがそれにいち早く反応しレテイシアの前に出た影があった。

さつきはレテイシアを背にすると右手を前に突きだして声をあげる。

『『全<sup>ア</sup>て遠<sup>ヴァ</sup>き理<sup>ロ</sup>想<sup>ン</sup>郷』』

するとさつきの前に黄金に輝く鞘が現れ。数百のパーツに解れて六人を包むように展開した。

「いたぞー！吸血鬼は石化させた！すぐに補……獲……」

しかしそこには誰一人石化等していない光景があった。

「何故だ!?何故石化していない!?ゴーゴンの威光は確かに直撃したはず！」

「いったいなになが……」

ゴーゴンの威光により石化するものと思っていたレテイシアも驚きを隠せないでいた。

「ちよつといいかしら?」

さつきの呼び掛けに羽根の生えた具足を履いた襲撃者はさつきの方を向いてしまった。さつきの瞳を見てしまった襲撃者達は次々と落下していく。

「ほら、皆ぼーつとしてない縛るの手伝って」

さつきは地面に倒れ意識を失っている襲撃者を縛っていく。

「おい、孫姫。いったいなにをやったんだ?いきなり落ちてきたが」



十六夜も襲撃者を縛りながらさつきに聞く。

「これは・・・もしかして魔眼か？」

レティシアは地面に転がった襲撃者を観察するとその表情から何かの暗示がなされていることに感づいた。

「ええ、魔眼で意識を落としました・・・これで全員ね、それじゃ行きましょうか」

「行くってどこに？」

「勿論白夜叉のところですよ、”サウザンドアイズ”

関係なら白夜叉に聞くのが早いですから」

大人数で行くのもどうかということもあり。十六夜、さつき、黒ウサギと当事者のレティシアの四人は”サウザンドアイズ”二一〇五三八〇外門支店を目指すのだった。

はい、交渉と駆け引き（笑）です。

夜も更け、夜空には星が輝いていた。一晚遅れの満月が箱庭を照らしている。

街灯ランプは仄かな輝きで道を照らしているが、周囲から人気らしいモノは一切感じられない。

“サウザンドアイズ”の門前に着いた四人を迎えたのは例の無愛想な女性店員だった。

「お待ちしております。中でオーナーとルイオス様がお待ちです」

「黒ウサギ達が来る事は承知の上、ということですか？あれだけの無礼を働いておきながらよくも『お待ちしております』なんて言えたものデス」

「……事の詳細は聞き及んでおりません。中でルイオス様からお聞きください」

定例文にも似た言葉にまた憤慨しそうになる黒ウサギだが、店員の彼女に文句を言っても仕方ない。店内に入り、中庭を抜けて離れの家屋に黒ウサギ達が向かう。

「うわお、ウサギじゃん！うわー実物初めて見た！噂には聞いていたけど、本当に東側にウサギがいるなんて思わなかった！つーかミニスカにガーターソックスって随分エロいな！ねー君、うちのコミュニティに来いよ。三食首輪付きで毎晩可愛がるぜ？」

ルイオスは地の性格を隠す素振りも無く、黒ウサギの全身を舐めまわすように視姦してはしゃぐ。

「なんでかな？最近似たような言葉を聞いた気がするけど？」  
さつきは白夜叉を見て言った。

「失礼な！私をルイオスのような性欲にまみれた品の無いヤツと一緒にするでないわー！」

白夜叉が反論しながらルイオスをこき下ろす。

「白夜叉様も大概なのでどちらも変わらないのデスヨ!!」

「あっははははは！白夜叉も冗談きついなあ、まあうちに来ればそ

の美脚は僕のベッドで毎晩毎晩好きになだけ開かせてもらおうから間違っていないけどね」

「お断りでございます。黒ウサギは礼節も知らぬ殿方に肌を見せるつもりはありません」

嫌悪感を吐き捨てるように言うと、隣で十六夜がからかう。

「へえ、俺はてつきり見せる為に着てるのかと思っただが？」

「ち、違いますよ！これは白夜叉様が開催するゲームの審判をさせてもらう時、この格好を常備すれば賃金を三割増しすると言われて嫌々……」

「ふうん？嫌々そんな服を着させられてたのかよ。……おい白夜叉」

「なんだ小僧」

キツと白夜叉を睨む十六夜。両者は凄んで睨みあうと、同時に右手を掲げ、

「超グツジョブ」

「うむ」

ビシッ！と親指を立てて意志疎通する二人。一向に話しが進まず、ガクリと項垂れてしまった黒ウサギ

「えっと、プライベートルームまでその服を着る必要が無いのに着ていたら嫌々じゃないんじゃないかな」

さつきの言葉に黒ウサギは自身が進んで着用していた事実気付き顔を青ざめる。

「あの……御来客の方も増えましたので、よろしければ店内の客間に移りましょうか？」

女性店員の言葉に一度仕切り直す事になった一同は、「サウザンドアイズ」の客間に向かった。

\*\*\*

黒ウサギが事のあらましを説明するが感情的になっているため、さつきが説明する事になった。

「内容としましては、レティシアさんが黒ウサギに会いに来ましてお茶をしていたんです。話しが新しく入ったメンバーの事になった

のですが話しがメンバーの実力がどれ程なのかということになりまして、代表で十六夜とレティシアさんが軽く手合わせする事になりました。その後、一様の決着が着いた頃に狙っていらしたのかいきなり「ペルセウス」がゴーゴンの威光を撃ってきたのです。レティシアさんは客人としてお迎えしていたので「ペルセウス」を迎撃させていただきました」

さつきは出来るだけ丁寧に使用人ぼく話し、ゴーゴンの威光を防いだことはあえて言わずにルイオスが自身に過剰な警戒心を抱かないように気をつけていた。

ルイオスの警戒心を少しでも下げる為にさつきは部屋に入る前にメイド服に着替えて自身がプレイヤー側ではなくメイドと認識するようにした上で。

「へえ、じゃあ何？全面的にこつちが悪いと？」「ノーネーム」に払う礼儀なんて無いの？それにさ、証拠でもあるの？無いよね、文句があるなら証拠を出してもらわないとね」

さつきをメイドと認識しているルイオスは自身が優位であるという間違った自信からさつき達「ノーネーム」に対しなめた言動をとる。

「映像音声付きでいいならありますけど、公開して困るのはあなた達」ペルセウス「ですがそれでも？」

「いつのまにそんな物用意してたんだ？」

十六夜はさつきがメイド服に着替えたのを見てなんとなく察したため口裏を合わせる事にした。

「これから住む場所に侵入者用の結界と監視を付けるなんて常識ですよ？」

さつきはなにを当たり前の事をと首を傾げた。首を傾げたのは外敵への警戒心はあるが常識がずれた天然だと思わせるための演技だ。実際には映像音声付きの記録等はない、さつきは部屋に入る前からブラフとハツタリを敵7・味方3の割合で（十六夜には感づかれたが）全員に対して行っていた。

「いえさつきさん、鍵をかけるならまだしも結界と監視を付ける事

を常識なんて過分にしておいた事がないデス」

「そうなの？ 私の知りあいにはこれに認識障害と自動迎撃結界が追加されるからこれでもかなりやさしいと思うのだけど」

さつきの言う常識常識に少し引きながら黒ウサギは思っていた、認識障害や自動迎撃結界を家に付けるのはいったいどんな知りあいのかと。

「そんな事はどうでもいいよ。それで何？ まさかその証拠と吸血鬼を交換なんて言わないよな。悪いけど」ノーネーム「じゃ信用なんてされないから」

「まさか、この証拠での代価は我々」ノーネーム「との決闘です。受けないのであればこの証拠を白夜叉さん経由で拡散します。受けるのでしたらこの場でこれを破棄致します。」

受けなければ拡散するというさつきの言葉にルイオスが取った行動は。

「嫌だね、なんで」ノーネーム「と決闘なんてしないとイケない？ 七桁の」ノーネーム「ごときと決闘したなんて」ペルセウス「の品にかかわる」

否だった、ルイオスは例え白夜叉経由でも「ノーネーム」の証拠では力が無いと判断したためだ。

「はあ。ルイオスよ、プライドを持つなどは言わん。だからといってコミュニティの格で相手の実力を決めつけるのは愚か者の考え方だぞ。おんしと話しておるさつきも実力でいえば四桁、いや下手をすれば三桁に届くかもしれない強者だ」

さつきとルイオスの駆け引きに上位者にありがちな思考をした白夜叉が余計な横槍を入れる。

「それにさつきは箱庭二桁」タイプ・ムーン「の縁者だしの。決闘を受けねば」ペルセウス「は跡形もなく消えるだろうな」

さつきが二桁のコミュニティの縁者であり実力が四桁並みと言われてルイオスは黙る。

一方さつきは身に覚えの無いコミュニティの名前と桁、自身の実力を言われて戸惑ったが直ぐに白夜叉のブラフによる援護射撃と割り

切り白夜叉の話をスルーする事にした。だが白夜叉のせいではつかのさつきのブラフとハツタリが無価値にされたので白夜叉も巻き込もうと思いを巡らせる。

「ちっ、受けてやるよ、僕だって二桁のコミュニティに目なんてつけられたくないからね。だけど君がゲームに参加しないならだけど」

ゲームを受けると言いながらさつきの参加を拒否するルイオス。

「元々今回のゲームには参加するつもりはありませんでしたので構いません。あとは決闘の日どりですが一週間後でどうでしょう？」

「了解、じゃあその吸血鬼を渡して貰おうか」

「それなのですがゲームまでの一週間のあいだレティシアさんを白夜叉さん預りにしたいと思います。」

「なんで・・・」

「いいですね？」

「わかった、吸血鬼はゲームまでの一週間白夜叉の預りでかまわない」

いろいろと面倒になったさつきは魔眼を使ってルイオスの意志を変えた。

はい、白夜叉との夜語りです。

ルイオスとの交渉？も終わり私たちは「サウザンドアイズ」の店の前にいます。ルイオス？さつきと帰りましたよ。

あの顔は自分の勝ちを疑っていないひとの顔でしたのでろくな準備もしないのでしょうか。

「十六夜、お膳立てはしたのでちゃんと勝って下さいね」

「任せてくれていいぜ、まあ今回はチームプレー必須のゲームだからお嬢様達も頑張ってもらわないといけないけどな」

十六夜は今回のゲームは一人では攻略が出来ない内容なため飛鳥達の参加を認めた。出来れば一人でやりたかったらしく少し不満そうではあったが。

「ですがさつきさんまで」「サウザンドアイズ」に残らずとも良かったのでは？」

黒ウサギが「サウザンドアイズ」に残る事になったさつきを引き留める。

「レティシアさんを一人で白夜叉の所に一週間も居させるわけにはいかないから、それに私も白夜叉に用があるし」

「なるほど元々そのつもりだったってことか」

「・・・しかし」

「それぐらいにしてやれよ黒ウサギ、孫姫には孫姫の考えがあるみたいだし。ほれさつきと帰るぞ、お嬢様達に話をしないといけないしな」

十六夜は黒ウサギを促す。

「待って十六夜、これを飛鳥に渡して貰える？」

私はギフトカードからガルドの所から持ってきた銀剣を直接触らないようにして十六夜に渡す。

「剣か？・・・材質は銀だな・・・ああ、お嬢様の護身用か。わかった、ちやんとお嬢様には渡しておく」

十六夜は銀剣をギフトカードにしまうと今度こそ「ノーネーム」のホームに帰っていった。

\*\*\*

十六夜達を見送った後、私は話し合いをした客間に戻って白夜叉の対面に座った。

「まさかおんしまで残ると言い出すとは。いくら此度のゲームに参加しないとはいえ策を考えてやる事はできるだろうに」

白夜叉は フウ と息を吐くと少し真面目な目付きになった。

「それで？私に聞きたいことがあるのだろうか。気にせずゆうてみよ」

「あれ、やっぱり分かりますか？それじゃあ遠慮なく。さつきの話で出た二桁とか”タイプ・ムーン”って嘘ですよ」

私は先程のルイオスとの交渉時に白夜叉が言っていた事について聞いた。

「ほお、よくわかったな、ルイオスの奴は気づかなかったというのにな」

やはりさつきの予想通り二桁と”タイプ・ムーン”は白夜叉の嘘だった。

「まあ正しくはかつてはになるがの。黎明期の頃は全ての自然衛星Ⅱ月とした膨大な霊格を持つておつての。今はⅠ5に別れておる月の主権は元々あやつが持つておつたのを別けたものだ。しかし何を思ったのかあのあやつは箱庭の開闢時に箱庭から出ていってしまったの。

かつては観光気分夢気分で世界を滅ぼそうとしたり、陸地を砕きピンボールをしようとしてたり。・・・今の三桁上位以上の者が止めねばどうなっていたことか。・・・だが何故かみな止めはしても封印や討伐はせんかった。あれも一つの人望というやつだな。だがいくら外界に出たとはいえよもやあやつを倒す事のできる者がおるとはの」

白夜叉の話が長くなってきたうえに話が脱線しだした。これだから年寄りには。

「むっ。今、私の事を年寄りと考えなんだか？」

ちっオマケに勘も良い。

「考えてないですよ。それにしてもこっちでもあつちでもやつて





「ギフトカードですか？・・・確かに見て貰ってなかったですし聞きたいこともあります」

元々そのつもりだったので白夜叉にギフトカードを渡した。

白夜叉は私のギフトカードを見て徐々に表情を険しくしていく。

「吸血鬼でありブリュンスタッドの名前を持っているおんしがロード・オブ・ヴァンパイア死徒二七祖のギフトがあるのはまあよい。まあよいが何故月の主権である赤いブリュンスタッド月まで持っている？これはあやつが唯一手放さなかった主権だぞ」

「これは一時的に預かっているだけで本当にただ持っているだけのものなので気にしないでください。私だつてできるならすぐに返したいんです、私には負担が大きすぎてこれを持っているだけで身体能力が下がりますし・・・」  
なので預かってください、私が持っているより白夜叉が持っていたほうがいざというとき安全ですし」

実際重いんですよ。使えないのに封印のせいで負担がかかって身体能力は下がるし。なんか狙われそうな気がしますし。

「あやつが預けただけでも凄い事だが。それに預かって欲しいということだが、すまんがそれはできません。それはおんしがどうにかせねばならん」

「・・・そうですか、なら仕方ないですね」

自分でどうにかしろですか。流石に甘やかしてはくれませんか。

「主権についてもまあ・・・まあよいだろう。だがこのドレインガーデン枯渴庭園というのはいったいどんなギフトだ。名前からしてなにかしらを枯渴させる場を造り出すギフトのようだが」

「これは・・・その。私の心とゆうかなんとゆうか。・・・白夜叉は固有結界って知ってますか？」

世界を自己の心象風景で塗り替えるって言うて良いのかな？

「なるほど固有結界か。確か自分の心象世界を侵食させることで、一定範囲内を現実世界とは異なる法則の支配する異界に変えるだったな。ならばこれを使えばおんしの心象世界が見れるという訳か」  
あつ知ってたんだ。とゆうか見たいのか。

「あまり人の心の底を覗くようなまねはするものじゃないですよ。それに私の枯渴庭園ドレイン・ガーデンは一度展開したら自分じや止められないし敵味方関係無しに巻き込むから使い勝手は悪いです」

あれは他人に見せるものじゃないから。私だってできるだけ使いたく無いの・・・お腹すくし。

「むっ、そうか。見てみたかったが残念だ」

やっぱり見たかったの!?!いや白夜叉なら大丈夫そうですね!?!つていやいやそんなどうしようもないことは脇に置いておいて聞きたいことを聞いておかないと。

「そんなことよりもギフトで気になる事があるんですけど。ギフトって世界が変わると内容も変わるものなんですか?」

「ギフトが変わるだど?いやそんなことは聞いたことがないが。どのギフトだ?」

そう言つて白夜叉がギフトカードをさつきに渡す。

私は白夜叉からギフトカードを受け取るとギフトカードからゲイ・ボルクを取り出して白夜叉に渡す。

「槍か。少し禍禍しいが魔槍の類いでは下位のものか。してこれのギフトが変わつたど?してどのようになつたのだ」

「元々は因果を逆転させる力を持っていたんだけどそれが変わったみたいなんです」

「さて!因果を逆転させる力を持つだど!?!おんし、いやさつき。いったいこれをどこで手にした!因果を逆転させる武器など箱庭でも存在しないのだぞ!!」

白夜叉はギフトが変わつたことを忘れたかのように食い付く。

「ああ、無いんですね。・・・いや、となると立証が出来ないからなくなつた?。箱庭に製作できる人がいない?でも私の世界では材料と製作者はつきりしている。なら何故?いや待て、必勝と必殺のギフトはあるのに。いやあれはあれは因果の操作は関係無いし確定させるには放つ必要性が・・・」

「おん、やつぱり」

・・・確か私の世界と箱庭ではメデューサに大きな差異があったはず。変光星であるアルゴルの解釈は私の世界にはなかったし、いやそもそも箱庭のメデューサはアルゴールと名前が変わってるから。ああ！こんなことならちゃんと言と神話とか読んでおくんだった。

「さつき、聞こえておるか？」

となるとゲイ・ボルクの製作者にも箱庭との違いが・・・白夜叉！私は白夜叉に自分の予想を聞くことにした。これが合っていればギフトが変わったことも納得することができる。

「なったんだ。人が呼んでも気づかずぶつぶつ言いだしたと思ったら突然」

「白夜叉。すいませんが箱庭の世界にスカサハはいますか？」

「スカサハだと？いやスカサハではなくスカハサなら居るが。」

「スカサハではなくスカハサ？。名前が違う？アルゴールと同じ理屈だとすれば・・・」

「おいさつき。・・・はあまたか」

なら名前が違うことで霊基、いや箱庭なら霊格が違うならスカサハのゲイ・ボルクのギフトをスカハサの霊格に当てられた結果変わったのなら理屈は通る？」

うん。実際に立証ができるかはともかく納得はできた。まあ元々使えたとしてもマトモに中らないけどね！！

「ありがとうございます。おかげで納得することができました。」

「そ、そうか？それなら良いが」

はい、ペルセウス戦です。

あれから一週間が経ちました。

「私達は今、コミュニケーション〃ペルセウス〃対〃ノーネーム〃のゲームのために白亜の宮殿の入口に来ています。実況は私弓塚さつき。解説には無自覚のエロとその希少性から多くのファンがいる黒ウサギでお送りします」

「さつきさん!? そのおかしなテンションはいったいどうしたのデスカ!?!」

「さあ、今回行われるギフトゲームの内容はこれだ!」

「無視デスカ!?!」

〃<sup>ギアスロール</sup>契約書類〃 文面

『ギフトゲーム名』 FAIRY TALE in PERSEUS 〃

・プレイヤー一覧

逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

レン

・〃ノーネーム〃ゲームマスター ジンⅡラッセル

・〃ペルセウス〃ゲームマスター ルイオスⅡペルセウス

・クリア条件

ホスト側のゲームマスターを打倒

・敗北条件

プレイヤー側のゲームマスターによる降伏。

プレイヤー側のゲームマスターの失格。

プレイヤー側が上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・舞台詳細・ルール

\*ホスト側のゲームマスターは本拠・白亜の宮殿の最奥から出てはならない。

\*ホスト側の参加者は最奥に入つてはいけない。

\*プレイヤー達はホスト側の(ゲームマスターを除く)人間に

姿を見られてはいけない。

\*姿を見られたプレイヤー達は失格となり、ゲームマスターへの挑戦資格を失う。

\*資格となったプレイヤーは挑戦資格を失うだけでゲームを続行する事はできる。

### 宣誓

上記を尊重し、誇りと御旗の下、“ノーネーム”はギフトゲームに参加します。 “ペルセウス”印』

「さあ、このような内容ですが”ノーネーム”の皆さんの様子を見てみましょう」

さあ十六夜達はどうするんでしょう？原作通りかそれとも何かしらの変化があるのか。因みに黒ウサギは十六夜達の所に行っていました。

「姿が見られれば失格、か。つまりペルセウスを暗殺しろってことか？」

「それならルイオスも伝説に倣って睡眠中だという事になりますよ。流石にそこまで甘くは無いと思いますが」

「YES。そのルイオスは最奥で待ち構えているはずデス。それにはまずは宮殿の攻略が先でございます。さつきさんが捕らえた”ペルセウス”のメンバーと所有していたギフトは返還していますので、伝説のペルセウスと違い、黒ウサギはハデスのギフトを持っておりません。不可視のギフトを持たない黒ウサギ達には綿密な作戦が必要です」

今回のゲームはペルセウスの伝説の一部を倣ったもので”主催者”側に気付かれずに目的地に到達しなければ、戦うまでもなく失格してしまう。

「見つかったら者はゲームマスターへの挑戦資格を失ってしまいます。同じく私達のゲームマスター。——ジン君が最奥に到達できずに失格の場合、プレイヤー側の敗北。なら大きく分けて三つの役割分担が必

要になるわ」

「うん。まず、ジン君と一緒にゲームマスターを倒す役割。次に索敵、見えない敵に感知して撃退する役割。最後に、失格覚悟で囮と露払いをする役割」

「なら、春日部が索敵と撃退だな。春日部は鼻が利くし耳も目もいい。不可視の敵は任せるぜ。ルイオスを倒す役割は戦力的観点から俺がやるぜ」

「あら、じゃあ私は囮と露払い役なのかしら？」  
むつと少し不満そうな声を漏らす飛鳥。

「悪いなお嬢様。俺も譲ってやりたいのは山々だけど、勝負は勝たなきゃ意味がない」

「……ふん、いいわ。今回は譲ってあげる。なら、レンの役割はどうするのかしら？」

飛鳥達三人の役割が決まったがレンの役割も決めなければならぬ。  
い。

「……」

するとレンは人の姿から子猫へと姿を変え十六夜達を見上げる。  
すると十六夜がレンの視線から何かを感じとり。

「なるほど。いいぜ。だが自己責任だという事は理解しておけ」

十六夜はレンの自己責任で自由にさせることにした。

「……」

レンはコクンと頷くと皆の所に寄ってきたさつきに近づいていった。

レンが寄ってきたので抱き抱えながら十六夜達の話をお聴くことにしましょうか。

「これで皆の役割が決まったわね。十六夜君、譲ってあげるのだから負けたら承知しないから」

「ですが、必ず勝てるとは限りません。油断をしているかわかりま

せんし。していなければ、非常に厳しい戦いになると思います」

四人の目が黒ウサギに集中する。対してさつきは白亜の宮殿を見上げていた。飛鳥がやや緊張した面持ちで黒ウサギに聞いた。

「……あの外道、それほどまでに強いのか？」

「いえ、ルイオスさんご自身はさほど。問題は彼が所持している「星霊アルゴール」そう星霊アルゴール……って、え？……さつきさんご存知なのですか？」

「ご存知もなにも知りあいだから。まあ私の世界での話だけど。ペルセウスの最も有名な逸話、女怪メデューサの暗殺。あの時のゴーゴンの威光はつまりそうゆうことなのでしょう。箱庭ではどんな話になっていくか知らないけど私の所では物静かな人格者です。間違ってもアルちゃん超可愛いし……なんて殺意MAXな事なんて言いません」

「なんか孫姫が語り出したが、長くなりそうだし無視してさつきとゲームを始めようぜ」

十六夜はさつきの語りを無視する事にし。白亜の宮殿の門に近づくと、轟音と共に、白亜の宮殿の門を蹴り破るのだった。

\*\*\*

私達は先行してルイオスの居る部屋に来ました。頭がじんじんします。理由？黒ウサギにハリセンでおもいつきりはたかれましたよ。何ですかあれ、衝撃は凄いなにあんまり痛くないってどこの匠の作品ですか！。

「それで、私達はこうして待っていないければいけない訳ですが。ぶつちやけ暇です。」

「暇って、まだゲーム開始から10分と経っていませんか？」

「いや、やることがあるならまだしもブーツと待っているだけと言うのも。……そうだ、レティシア。組手しない？魔法球の中でやってみたいに」



「そうだな。軽くならいいだろう」

レティシアは髪を結んでいたリボンをほどき、子供の姿から大人の姿になった。

「やる気満々ですね。まず「あっはははははっひやははは」来ましたか」

突然笑いだした黒ウサギの方をむけば、両手をわきわきさせながらニヤニヤしている十六夜ともう好きにしてくださいと肩を下げるジンがいた。

レティシアはリボンを結び直すときつきの側に寄った。どうやら十六夜はレティシアの方を見ていなかったようだ。見ていたらレティシアに話しかけていただろう。

黒ウサギは十六夜に説教し始めるが十六夜は馬耳東風とばかりに聞き流している。

「……ふん。ホントに使えない奴ら。今回の一件でまとめて粛清しないと」

翼の生えた具足を履きルイオスは空に浮かんでいた。

「まあでも、これでこのコミュニティが誰のおかげで存続出来ているのか分かっただろうね。何はともあれ、ようこそ白亜の宮殿・最上階へ。ゲームマスターとして相手をしましょう。……あれ、この台詞を言うのはじめてかも」

それはひとえに「ペルセウス」のメンバーが優秀だったからである。

「情報の無い状態から一週間での決闘だからな。勘弁してやれよ」

「フン、名無し風情に突破された時点で重罪さ」

ルイオスは「ゴーゴンの首」の紋が入ったギフトカードを取りだし、光と共に燃え盛る炎の弓を取り出した。

それを見て黒ウサギの顔色が変わった。

「……炎の弓？ペルセウスの武器で戦うつもりはない、という事でしょうか？」

「当然。空が飛べるのになんで同じ土俵で戦わなきゃいけないのさ。メインで戦うのは僕じゃない。そんなリスクを負う決闘じゃないからな」

小馬鹿にするルイオスは首にかかったチョーカーに付いている装飾品を外し。

「目覚めろ——」アルゴールの魔王“!!”

装飾品は強い光を放ち始める。光は褐色に染まり、白亜の宮殿に甲高い女の声が響き渡った。

「ra...Ra、GEEEEYYAAAAAa a a a a!!」

それは最早、人の言語野で理解できる叫びではなかった。

冒頭こそ謳うような声であったが、それも直ぐに不協和音へと変わる。

叫びの意味がわからないですね。言語野失った理性の感じられない魔性の声。これが箱庭のアルゴール・いえ、これがメデューサと同一なんて。

「よけろ、黒ウサギ!!」

えっ、と硬直する黒ウサギ。十六夜は黒ウサギとジンを抱えて飛び退いた。

直後、空から巨大な岩塊が山のように落下してきた。

「ヤっつきさん!!」

二度三度と落下している岩塊を避けようとすらないさつきに黒ウサギが叫ぶ。

しかしさつきは落下し、せまる岩塊をなんと蹴りあげたのだ。蹴りあげられた岩塊は粉々に碎ける。

「なっ!?!落下する雲を蹴り砕くだって!!なんてやつだ!」

「く、雲ですって・・・!?!」

瞬時に世界を満たすほどの光を放出した女の名を、黒ウサギは戦慄とともに口にすする。

「星霊・アルゴール・・・! 白夜叉様と同じく、星霊の悪魔・・・!」

一つの星の名を背負う大悪魔。箱庭最強種の一角、“星霊”

「はあ、黒ウサギは名前に囚われすぎです。あれはどう見ても残り粕、三下も良いところですよ」

さつきは星霊の悪魔であるアルゴールを三下と切って捨てた。

「ほら、少女は愛嬌、女は度胸。自分が女だと思うなら堂々としてなくちゃ。むしろ、自分が少女だと思うなら周りの情報を冷静に判断しなくちゃね」

そう言っさつきは黒ウサギの背中を叩きながら笑う。

「いえ、周りの情報を冷静に判断するのは少女ではないのでは？」

「何言ってるの愛嬌とはすなわち強かである。少女ほど周りの情報を冷静に判断して行動に移す計算高い存在はそうそういないんだから」

さつきは遠回しに黒ウサギは何も心配しなくても大丈夫ですよと言っているのであるがあまり伝わっていないようである。

「下がってろよ御チビ守ってやれる余裕はなさそうだ」

十六夜がジンに振り返る。ジンは申し訳なさそうに一歩下がった。

「すいません・・・本当に何もできず」

「別にいいさ。どうする？例の作戦は止めておくか？」

「十六夜さん。このゲーム。僕らには貴方がいます。貴方が本当に魔王に打ち勝てる人材だというのなら。この舞台で証明してください」

「OKよく見てな御チビ」

十六夜はジンの髪をクシヤクシヤと撫でてから前が出る。

「さ、それじゃ準備はいいかよゲームマスター」

「ん？二人でかかってこないのかい？後ろの子がリーダーなんだから？」

「おいおい自惚れるなよ。うちの坊ちゃんが手を出すまでもねえ」

「——はっ。名無し風情が、精々後悔するがいいッ!!」

「ハッ、お前がな!!」



はい、終了です。

「ra、GYAAAAAaaaaa!!」

アルゴールの灰翼とルイオスの輝く翼とが舞台に舞う。ルイオスはアルゴールの陰に隠れながら炎の弓を引く。しかし十六夜は蛇のように蛇行する炎の矢を気合一喝で弾き飛ばす。

ルイオスは炎の弓では無駄だと悟り、舌打ちして炎の弓を仕舞った。そして代わりにギフトカードから取り出したのは一振りの鎌。

縦横無尽に空を駆けるルイオスとアルゴールは挟み込む形で十六夜に接近する。

「押さえつけろ、アルゴール!!」

「RaAaAaa!!LaAaAa!!」

甲高い声を上げながら十六夜に両の腕を降り下ろすアルゴール。十六夜はそれを両手を組み合うようにして受け止める。

「ハッ、いいぜいいぜいいオイ!!いい感じに上がってきたぞ!」

「RaAaAaaGYAAAAAaaaa!!」

十六夜とアルゴールの押し合いになるが、それも僅か一瞬の事でアルゴールは耐えきれずに押しきられて、その場にねじ伏せられる。

「GYAAAAAaaaaa!!」

「ハハ、どうした!今のは本物の悲鳴みたいだぞ!」

十六夜がアルゴールの相手をしている間にルイオスは十六夜の背後にまわり襲いかかる。

「凶に乗るな!」

「テメエがな!」

鎌を片手に疾駆するルイオスを下半身をひねった勢いで蹴る。ルイオスはそれをすんでのところを上に戻避することで難を逃れる。ルイオスは一瞬でも回避が遅れていたら手痛い一撃を受けていたと冷汗を流す。

「チッ、外れたか。なんだ?偉そうにしてたわりには冷静だな。わざと隙をさらせばもつと慢心して突っ込んでくると思ったんだが」

「当然だね、アルゴールと組み合える奴の隙なんて信用できないか

らね」

思いの外冷静に判断するルイオスにむかつて気絶したアルゴールを投げる十六夜。しかしルイオスはアルゴールを装飾品の状態に戻す事でそれを回避する。ルイオスは十六夜から二十メートル離れた場所に降り立つ。

「なんだ？もう種切れか？もつと楽しめると思ってたんだが」

「本当は承ける必要の無いのを受けさせられた決闘だ。楽しませる為じゃないね」

「いや「……………」分かったよ。だが負けるんじゃないぞ」

十六夜の裾を引っ張り中断させた人影Ⅱレンは十六夜と入れ替わるようにルイオスと対峙する。

\*\*\*

十六夜とルイオスが対面で睨み合う形になり。そこへレンが十六夜の裾を掴む。十六夜とレンが視線を合わせると十六夜は黒ウサギ達の元へ戻る。

「どうしたのですか十六夜さん？それにレンさんがなぜ」

「いや、チビ猫が自分がやるって言うからな。まあ始める前に決めてた事なんだが。……………それで、孫姫は何をしてるんだ？」

さつきは何処から調達したのか簡易テーブルを設置していた。

「いや、レンは喋れないから実況放送でもしようかと」

「ほお、それで、本音はなんだ？」

「レンが戦うなんてそうそう無いから記録に残そうかと」

気づけばいつの間にかビデオカメラまで準備していた。

「面白そうだな。俺も混ぜろ」

十六夜はそう言ってさつきのとなりの椅子に腰かける。

\*

「さあ、ルイオス・ペルセウス対レンの試合が開始されます。おっと？レン選手がいきなり突っ込んだ！ルイオス選手鎌を横に一閃、しかしレン選手は猫化でそれを回避！そのままルイオス選手の懐に入る。レン選手は人化しながら大きくジャンプ！ルイオスの顎に拳がヒット！ルイオス選手思わず後退！レン選手はまたもや前進、しかしルイオス選手空に退避。だがそれを予期していたかレン選手いつの間にかルイオス選手の後ろを取っている。レン選手ルイオス選手を掴むとそのまま地面に投げた！！ルイオス選手地面に叩きつけられる。レン選手起き上がるルイオス選手の上に片足で着地。これにはルイオス選手涙目だ！！」

「チビ猫の体重の軽さに救われたな。これが人並みの重量なら今の背骨が砕けてるぜ」

「一旦ルイオス選手から離れるレン選手。ルイオス選手、鎌を杖の代わりにして何とか立ち上がった！レン選手立ち上がったルイオス選手に再接近！レン選手体を回しながらの連撃！これはレン選手の得意技、ロンドン・ロンド！！ルイオス選手再びダウン！ルイオス選手起き上がれない！！」

「今の連撃。一発が急所に当たったな」

「ペルセウス 側のゲームマスターの敗北を確認しました。よつてこのゲーム」ノーネーム 側の勝利とします！」

黒ウサギの声で「ペルセウス 戦は終わりを告げた。」

\*\*\*

その後。レティシアが「ノーネーム」に戻りメイドとなり。

招待された火龍誕生祭では魔王が現れ、さつきが雷の槍を投げてまわりを驚かせた。

アンダーウツドの収穫祭ではケルトの巨人の襲撃をさつきが場所が広いという理由で千の雷と燃える天空で殲滅し。サラの客将になつていたアルクエイドと再開して月の主権をアルクエイドに返し能力の制限がなくなったさつきが再開されたレティシアのギフトゲームで現れた魔獣を無双し、耀が謎解きをし、十六夜が止めをさして終わりを告げた。

再開された収穫祭ではさつきとアルクエイドはのんびりと過ごし最終日にさつきと蛟劉の格闘戦オンリーのエキシビジョンでアンダーウツドを沸かせた。

再び行われた火龍誕生祭では邪龍アジ・ダカーハが復活し、さつき、アルクエイド、レンにより自分達ごとアジ・ダカーハを隔離し地上への被害が最小に押さええるも重体に追い込まれる。さつき達の奮闘により増援が到着。多くの被害を受けながらアジ・ダカーハを討伐する。

十六夜達はそれぞれの目標のために“ノーネーム”から分かれ。さつき、アルクエイド、レンも新たにコミュニティを作るために“ノーネーム”を後にした。